

「茅ヶ崎学」への取り組み

—文教大学における「茅ヶ崎学事始め」の成果と展望—

A Challenge for Chigasaki-ology

—A Results and Prospects of “Introduction to Chigasaki-ology” in Bunkyo University—

小林 勝法*

Katsunori KOBAYASHI

Abstract

Bunkyo University offered “Introduction to Chigasaki-ology” as one of the Liberal Education courses in the spring term in 2010. This course consists of history, nature, culture, education system, agriculture, fishery, tourism, industries, government and so on. 18 professionals were invited and had a lecture with professors.

The distinguishing features of this course were as follows;

- (1) Co-sponsoring of Bunkyo University and Chigasaki Municipal Government
- (2) Studying together with university students and citizens
- (3) Many guest lecturers
- (4) Collaboration with guest lecturers and professors
- (5) Study support by web site

37 university students and 91 citizens attended this course. Most of them appreciated (1) and (2), (3) of the numbered features above. And they expect to select and investigate themes of lectures, and to have more opportunities of discussion with students and citizens.

はじめに

茅ヶ崎市にある文教大学湘南校舎では教養科目として、茅ヶ崎市と共催で「総合科目A-茅ヶ崎学事始め-」（以下、「茅ヶ崎学事始め」）を2010年春学期に開講し、学生のほかに100名を超える市民を受け入れた。筆者はこの科目の企画と運営に携わったので、その立場からこの科目の成果と展望について述べる。

I. 「茅ヶ崎学」の着想

地域の名を冠する「〇〇学」は、近年、全国各地で盛んに試みられており、青森学、秋田学、

山形学、岩手学、埼玉学、山梨学、渋谷学、岐阜学、佐賀学、熊本学と枚挙にいとまがない。これらは「郷土学」や「地域学」、「地元学」、「ご当地学」などと呼ばれており、その主体は大学のみならず、地域の図書館や博物館、生涯学習課などの行政機関など多様である。

2004年度から「郷土学」事業を支援している日本財団は、郷土学を「地域独自の歴史・文化・技術・伝統を後世に伝承していくための取り組み」としてとらえ、その効用を次のように整理している¹⁾。

・子どもからお年寄りまで地域住民が主体的に

* 文教大学湘南総合研究所研究員・文教大学国際学部教授

取り組むことにより、地域内の世代間コミュニケーションが活発化し、地域の個性や魅力に改めて気づくことができる。

- ・郷土（ふるさと）を愛する気持ちがさらに醸成される。

そして、日本財団は2008年度までの5年間で、全国で88の事業に支援した。この地域振興の支援活動は、2009年度からは助成対象を変更し、「郷土検定」に助成している。その変更の意味をweb siteから探ってみよう。「郷土検定」の意義は以下のように説明されている¹⁾。

- ・「検定」という形態を取ることで、多くの人に地域の魅力を知っていただくきっかけとなる。
- ・検定実施に向けた準備を通して、様々な分野で活躍する地域の団体が一体となって地域の歴史や文化を受け継ぎ、育んでいくことが見込まれる。

つまり、内容が漠然としてつかみ所のない「郷土学」から成果が目に見える形の「検定」への助成に変更している。茅ヶ崎では、市民活動団体の茅ヶ崎トラストチームがこの援助を受けており、「茅ヶ崎まるかじり検定」の創設に取り組んでいる²⁾。

筆者はこのような情勢を知り、文教大学湘南校舎が所在する茅ヶ崎を対象とし、地域と協働で茅ヶ崎学の構築ができないものかと考えた。幸い、文教大学には茅ヶ崎市の審議会委員として地域の問題に精通し、その解決に取り組んでいる教員が多くいるし、国際学部の海洋ゆりえ准教授は、指導するゼミナールの中で、「茅ヶ崎の宝探し＝茅ヶ崎学」をテーマに、地理・自然・歴史・観光史・農漁業・祭・環境など分野ごとにフィールドワーク、文献調査、インタビュー等をしてきた。

そこで、「茅ヶ崎の歴史や文化、産業、現在の課題などについて学び、市民参加の町づくりについて、学生と教員、市民と一緒に考える」ことを目的として、教養科目の「総合科目A」を開講することを考えた。この着想について7人の教員からも賛同が得られたので、共に授業計

画を立案し、茅ヶ崎市に共催の依頼をしたところ、快く引き受けてくれた。そして、市民活動推進課（当時）と生涯学習課（当時）がカウンターパートとして、講師の紹介や開催広報などで協力してくれた。

さらに、茅ヶ崎商工会議所と茅ヶ崎青年会議所からも協賛が得られ、紹介された講師と講義内容について協議して授業設計をした。

多数の講師を招聘すると共に、多数の市民を正規の授業に受け入れたことから、授業補助や事務作業、広報に通常の授業より多くの経費がかかった。しかし、これらについては、学長調整金を受けたことと教育支援課のみならず、総務課と生涯学習課の協力が得られたので実現できた。ほかの大学でもあまり例を見ない「地方自治体との共催授業」はこうして開講できた。

Ⅱ. 「茅ヶ崎学事始め」の内容と特長

1. 授業内容と担当講師

「茅ヶ崎学事始め」の授業内容と担当講師を表1に示した。茅ヶ崎市の歴史や自然環境から文化、教育、農漁業、観光、産業振興、行政など幅広いテーマを取り上げた。また、文教大学の歴史や市との関わりについての講義も用意した。全14回のうち、初回と最終回を除いた12回を市民が受講した。

学外講師としては、共催の茅ヶ崎市から服部市長に加えて、橋本・茅ヶ崎市教育センター長ほか6名の職員が教壇に立った。また、協賛の茅ヶ崎商工会議所からは田中会頭、大村・茅ヶ崎市観光協会会長、岩澤・元茅ヶ崎市商店会連合会会長と産業界の重鎮が熱弁をふるわれた。同じく協賛の茅ヶ崎青年会議所からは宮澤理事長がシンポジストとして登壇し、まちづくりにかける熱意を語った。

講師を学内外に分け、延べ人数で計算すると、学内教員が19名、学外講師が18名であった。このように多数の学外講師を招聘できたのは、茅ヶ崎市と商工会議所、青年会議所のお陰である。記して謝意を示したい。

表 1. 授業内容と担当講師

月日	内容・講師
4月12日	オリエンテーション、茅ヶ崎と文教大学 小林勝法教授、若林一平教授
4月19日	茅ヶ崎市のあらましと行政 若林一平教授、榊原敦・企画経営課主幹、窪田皓治・下水道河川管理課、小川尚子・収納課
4月26日	文教大学の歴史と行谷遺跡 大橋ゆか子学長、井上由佳講師
5月10日	茅ヶ崎の歴史・史跡 平野雅道・郷土史研究家
5月17日	茅ヶ崎のミュージアム活動 井上由佳講師、富永富士雄・文化生涯学習課
5月24日	茅ヶ崎の自然とまちづくり 藤井美文教授
5月31日	茅ヶ崎の観光史・観光動向 大村日出雄・茅ヶ崎市観光協会会長、新谷雅之・事務局長、海津ゆりえ准教授、文教大学学生
6月7日	茅ヶ崎の農業・漁業 青木隆さがみ農業協同組合、糸仁夫・茅ヶ崎丸大魚市場代表取締役、海津ゆりえ准教授
6月14日	茅ヶ崎の産業と経済 田中賢三・茅ヶ崎商工会議所会頭、岩澤裕・浜田屋代表取締役、本多和男・アルバック総務部長
6月21日	茅ヶ崎の食文化と経営 熊澤茂吉・熊澤酒造社長、横川潤准教授
6月28日	茅ヶ崎の祭り；大岡越前祭・浜降祭 小坂勝昭教授
7月5日	茅ヶ崎の教育 井上由佳講師、橋本和男・茅ヶ崎市教育センター長、松永昭治主査
7月12日	茅ヶ崎市のまちづくりと市民参加 服部信明・茅ヶ崎市長、宮澤泰隆・青年会議所理事長、藤井美文教授、山田修嗣准教授
7月23日	郷土学と検定によるまちづくり 小林勝法教授、沢田宣夫大学院生

2. 「茅ヶ崎学事始め」の特長

「茅ヶ崎学事始め」の特長として、次の5点を挙げることができる。

①正規授業で学生と市民の共修

市民を対象とした授業の場合、公開講座や生涯学習講座のように市民だけが受講することが一般的である。正規の授業を受講する場合は、科目等履修生か聴講生の申請をし、審査を受ける必要があり、文教大学でもそのようにしている。しかし、「茅ヶ崎学事始め」では正規の授業に無審査で受講を認めた。

そして、市民だけでなく学生と一緒に学ぶ機会を提供した。このことは、普段学生だけで受講している学生にとっても市民との交流から得られるものが大きいと期待した。

②多数の学外講師

前述したように18名の外部講師を招くことができた。このようなことは通常の授業では難しい。

③教員と学外講師の協同

外部講師を招く場合、その講師による講演だけになってしまうことが多い。しかし、「茅ヶ崎

学事始め」では大学教員と外部講師ができるだけ協同して授業を展開するようにした。どの授業も事前の打ち合わせに十分に時間を取り、授業の構成を決定した。そして、教員と講師が対談形式で授業を進めたり、協同で発表用のスライドを作成して授業を行ったケースもあった。

④共催と協賛

前述したように茅ヶ崎市と共催、茅ヶ崎商工会議所と茅ヶ崎青年会議所からは協賛を得た。その結果、多くの講師の謝礼を無料にでき大学側の経費負担を軽減できた。そして、その一方で、通常の聴講生の場合は検定料・登録料・履修費の合計で29,000円のところをこの授業では無料とした。また、広報については茅ヶ崎市の広報紙に開催の知らせを掲載してもらったほか、文教大学が作成したポスターを市内約200ヶ所の掲示板に掲示してもらい、ちらしも配付してもらった。

⑤欠席者への配慮

市民が12回の授業にどれだけ出席できるか心配であったので、欠席した回の授業内容を補えるように、「茅ヶ崎学事始め」のweb siteを作り、そこにその回の配付資料などを掲載した³⁾。

Ⅲ. 受講状況

1. 登録と出席状況

学生の履修登録数は表2に示す通りである。合計40名であり、例年に比べて受講者数が少ない。教養科目の「総合科目」は通常は200人程度の受講者がある。2008年度と2009年度も2010年度と同じ月曜日の5時限に開講したが、どちらも200人を超えていた。それに比べると受講者数が極端に少ない。その第一の理由は、茅ヶ崎に関する関心が低いからだと思われる。

表2. 学生の履修登録数 (学部・学年別)

	1年生	2年生	3年生	4年生	計
国際学部	5	8	11	3	27
情報学部	11	0	1	1	13
計	16	8	12	4	40

学年では、他の教養科目と同様に1年生と2年生が多い。国際学部の3年生が多いが、これは観光学を専攻している学生が卒業必要単位を超えて履修しているからである。

14回の授業のうち、10回以上出席しないと期末試験の受験無資格となるが3名がそれに該当した。残りの37名の平均出席率は90%であり、最小が71%で最大が100%であった。

市民の履修登録数は108人であった。募集は50人とし、それを越えた場合には抽選することにしてしたが、余りに多数の応募者数に歓喜するとともに圧倒され、結局、全員を受け入れることにした。性別と年代が把握できた101人の分布を表3に示す。

表3. 市民の年代と性別

	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
男性	1	3	2	39	26	2	73
女性	0	2	4	16	6	0	28
計	1	5	6	55	32	2	101

男性が女性の2倍以上で、年代では60代と70代が多い。最年少は37歳で、最高齢は82歳であった。

出席回数は0回、すなわち一度も出席しなかった市民が11人で、12回皆勤は31人であった。80代の二人は二人とも皆勤である。一度も出席しなかった市民を除いた97人の平均出席率は80%であった。

また、授業毎の出席者数と出席率は、最も低かった回が67人・69%で、最も高かった回が89人・92%であった。

2. 市民受講者の参加経験と情報媒体

文教大学や茅ヶ崎市が主催した講座のうち、参加したことがある講座を尋ねた結果は図1の通りである。有効回答数は70であり、回答は複数回答を認めている。

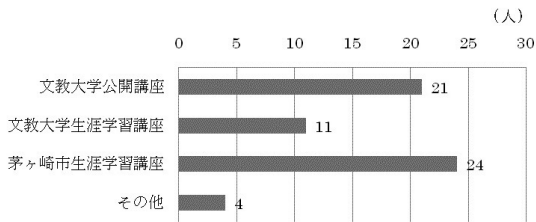


図1 過去の参加経験

最も多かったのが「茅ヶ崎市生涯学習講座」で24人であった。次いで、「文教大学公開講座」(21人)であった。「その他」の回答には、「市民大学」や「公民館主催講座」という回答があった。

いずれにも参加したことがない人が29人もおり、文教大学と茅ヶ崎市にとっては、この授業で新しい受講者を得たことになる。

「茅ヶ崎学事始め」の開催を何で知ったかを尋ねた結果は図2の通りである。有効回答数は70であり、回答は複数回答を認めている。

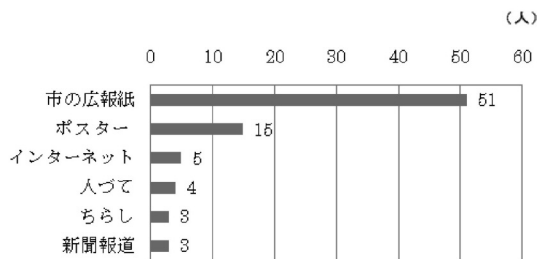


図2 情報媒体

最も多いのが「市の広報紙」で51人であった。「ポスター」(15人)や「ちらし」(3人)はあまり効果を上げなかったことがわかった。

3. web site閲覧

「茅ヶ崎学事始め」のweb siteには、講義スケジュールと毎回の配付資料、講師の写真を掲

載した。web siteへのアクセス数は表4に示したとおりである。2週間単位でアクセス数を示している。授業期間中の4月から7月までの平均アクセス数は65で、最小が35、最大が93であった。なお、授業が終了した8月にも15~34のアクセスがあった。

この数値が多いのか少ないのかを判断する基準を持ち合わせていないし、web siteがどのような教育効果を上げたかは検証できなかったが、いつも印刷して持参される市民もいた。

表4. アクセス数 (延べ数)

期間	アクセス数
4/24-5/5	35
5/6-5/22	77
5/23-6/5	93
6/6-6/19	70
6/20-7/3	38
7/4-7/17	70
7/18-7/31	69
8/1-8/14	15
8/15-31	34

4. 図書館利用

授業の前や後の空き時間に大学図書館を利用した市民は21人で、4月26日から7月12日の11授業日で合計延べ77回であった。空き時間を有効に活用していただこうと思い、図書館利用を紹介したが、実質受講者97人のうち、2割あまりの市民が利用したことになる。この図書館利用については実態を把握しただけで、市民から感想や意見は聞いていない。また、後に述べる受講アンケートの自由記述回答でも図書館に関する記述はなかった。

5. 受講満足度

最終回の授業で行った「学生による授業評価」によると、学生36人の受講満足度は5段階で3.74であった。36人中25人が4以上の評価をしている。他の教養科目の平均は3.83であり、こ

れと比べると若干低い。

市民については、最終回の時に全12回の授業について良かったかどうか尋ねた。その結果は、図3の通りである。棒グラフは左右で濃淡が示されているが、両方を合わせたものがその回の出席者数である。そして、左側(濃い方)が「良かった」と回答した人数である。したがって、左側の割合が満足者の割合を示している。

1回から12回まで、上から順に並べてあり、()内の数は何回目かを示している。「(1)茅ヶ崎のあらましと行政」は初回ということもあり、出席者が最も多い。しかし、内容は既知のことが多かったからか、「良かった」とする回答の割合は比較的少ない。「良かった」とする割合が多いのは「(3)茅ヶ崎の歴史・史跡」と「(8)茅ヶ崎の産業と経済」であった。なお、自由記

述回答には次のような回答があった。

「他県で生まれ育った、我々移住住民は郷土の歴史についての教育がなく、従って、郷土愛も仲々育たなかった訳ですが、このような企画でシニアにも郷土の歴史・地理・環境等を教えていただくことは非常に良いことだと感じました。」

6. 大学と市に対する意見

授業の最終回に行ったアンケート調査では、市との共催や外部講師、学生と市民の共修、テーマなどについて概ね評価する一方、さらなる工夫を求める声が多かった。主な意見を以下に抜粋する。

(1) 学生の意見

・市長など様々な方から生の声を聞ける貴重

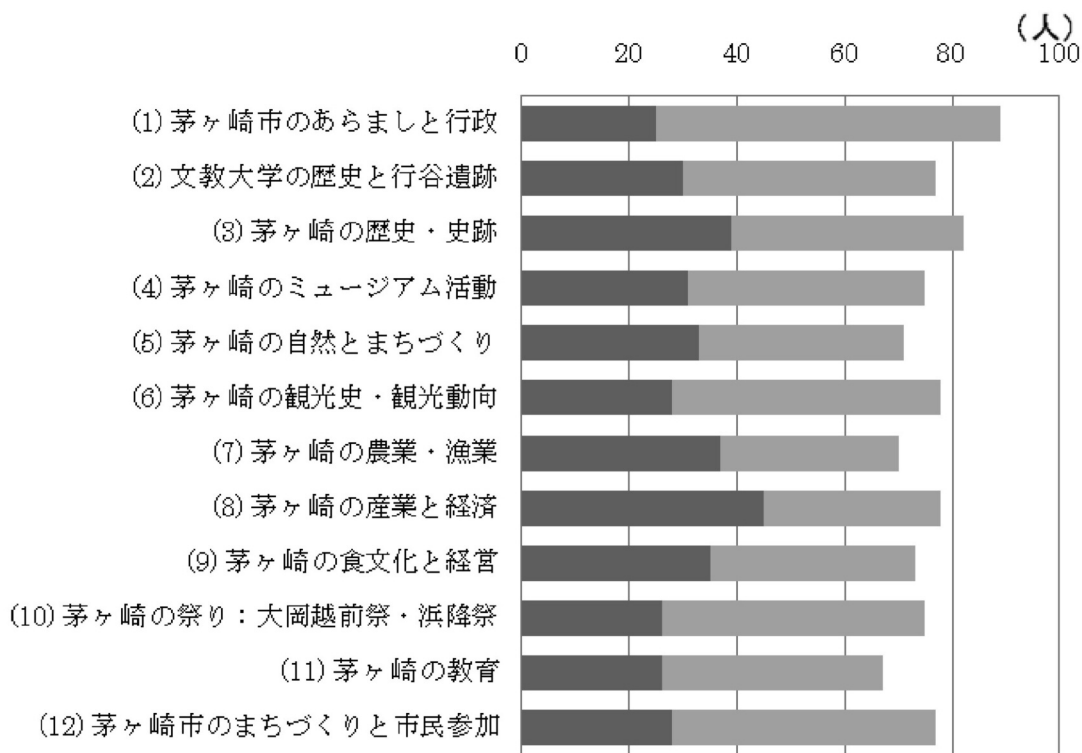


図3 良かった授業と出席者数

- な体験だった。(同様意見：計7件)
- ・教員とゲストの組み合わせは良かった。
- ・市民と学生がともに学べる良い機会。(同様意見：計7件)
- ・ディスカッションなどグループワークは楽しかった。(同様意見：計3件)
- ・ディスカッションなど交流する場がもっと多い授業であれば面白い。(同様意見：計8件)
- ・学生と市民が交流するイベントがあると良い。(同様意見：計3件)
- ・フィールドワークや体験ができる機会があると良い。(同様意見：計2件)
- ・自分の出身地の取り組みなどを調べるようにしたら良かった。
- ・学生が少数でアウェイな感じがした。(同様意見：計2件)
- ・市民と学生の割合を考えた方が良い。
- ・市民の積極的な姿を見ると意欲がわいた。
- ・茅ヶ崎が好きになった。

(2) 市民の意見

- ・地方自治体と地域に根ざす大学とが、一般市民の生涯学習の一環として「学び合う」機会を共同で創りあげることが、大変有難く、素晴らしいことと感じます。よい勉強の機会づくりを継続して戴きたくお願いしたい。(同様意見：計3件)
- ・テーマを絞り、1回だけでなく複数回で掘り下げた講座も検討願いたい。(同様意見：計8件)
- ・学生との交流が楽しかった。もう少し設けていただいたらより印象深いものになったと思います。(同様意見：計3件)
- ・産学共同か感じられる講義が多く良かった。地域コミュニティには積極的に考えていきたい。(同様意見：計3件)
- ・自治体と大学がジョイントして、市民の為に学習の場を提供することはひいては地域の発展につながることで、大切なこととっています。素晴らしい知的レベルの高い茅ヶ崎市ですね。

- ・茅ヶ崎市の歴史等に対してもっと講座、セミナーがあれば良いと思います。(同様意見：計2件)
- ・テーマ選定もさることながら、世代を超えて(20代~60、70代)学び合う(討議し合う)場は今後の町づくりに有用であると思います。市を見つめなおす良い機会になりました。
- ・来年度はもっと、市職員(担当課)の参加する講座を増やしてほしい。

IV. 学生の学習成果

学生の成績は、毎回の授業時の感想用紙と第14回の振り返りテストで成績評価した。毎回の授業時の感想用紙は、授業内容の理解度と考察力をもとに10点満点で担当講師が採点した。振り返りテストは30点満点であった。

合計を100点に換算した結果の受講者の平均点は71.0であった。成績の分布は表5の通りである。甘すぎず、辛すぎずの丁度良い成績であったと思われる。

表5. 成績分布

	(~90)	(~80)	(~70)	(~60)	(不合格)	計	
	AA	A	B	C	D	無資格	
人数(人)	3	9	11	8	6	3	40
比率(%)	8	23	28	20	15	8	100

V. 今後の課題と展望

1. 課題

今回の授業で見いだされた課題を整理すると次の4点にまとめられる。

①授業目的

学生の「社会への関心を高める」「問題発見と解決能力を高める」ことも授業目的として掲げていたが、授業後に行った調査ではほかの授業と比較して成果が得られたとは言えなかった。質問や意見は市民からがほとんどだった。振り返ってみると、授業方法が目的達成に合致していなかったと思う。単に情報提供をし、感想を

書かせるだけでなく、問題発見・解決に関する課題を課すべきであった。

市民の目的として、「茅ヶ崎市について詳しく知ってもらうとともに学生と議論してもらう」ことを掲げていたが、議論の時間は十分にとれず、交流の機会が多かったとは言えない。

②受講者数

Ⅲ.1.でも述べたように、学生の受講者数が40人と少なかった。茅ヶ崎に対する関心が低い表れだと思うが、茅ヶ崎に在住している学生ばかりではないので無理からぬ話である。授業のテーマ設定やタイトルを工夫する必要がある。

③テーマの深掘り

「事始め」として、多数のテーマを広く取り上げるために、1回の授業で1つのテーマとした。外部講師も招いたので、時間の制約もありテーマの掘り下げが十分にできなかった。受講者からもテーマの掘り下げを求める声が多かった。「事始め」の次の段階へ駒を進めるべきであろう。

④授業時間外学修時間

結果的に、出席して、ただ聞いていけばよい授業となってしまう、法令で定められた授業外学修時間を十分に確保できなかった。予習や復習を工夫する必要がある。

2. 展望

2011年度も「茅ヶ崎学」の授業を文教大学で開講することを計画中である。上記の課題を克服し、より充実した授業としたい。

そして、正規授業の他に文教大学生涯学習センターの有料講座として、「茅ヶ崎学ゼミナール」(仮称)を開講することも検討している。これは、知識習得型ではなく、知識探求型のいわゆるゼミナール形式の講座で、探求心旺盛な市民の需要に応えようとするものである。ゼミナールで得られた成果を地域に還元していくという形で茅ヶ崎学を豊にしていければと期待している。

謝辞：「茅ヶ崎学事始め」の授業は、茅ヶ崎市の共催、茅ヶ崎商工会議所と茅ヶ崎青年会議所の協賛を得て開講した。そして、多くの外部講師の協力がなければなしえなかった。多数の関係者に謝意を表す。

参考資料

- 1) 日本財団 <http://www.nippon-foundation.or.jp/>
- 2) 茅ヶ崎トラストチーム <http://chigasaki-trust-e.net/>
- 3) 茅ヶ崎学事始め <http://www.chigasaki-gaku.com/>